

『幼稚園の現場から』

31・幼稚園の音楽活動（その2）

原町幼稚園園長 鶴谷主一（静岡県沼津市）

トラヤ帽子店のこと

前回30号で「幼稚園でやる音楽は、楽しくなけりゃ！」ということを強調したが、その思いを持つに至った出会いが、東京葛飾の幼稚園で仕事を始めて3年目、1987年だったと思う。園長が「オモシロい人たちがいるから、見に行かないか？」ということで、姉妹園でやってたコンサートを見に行った。

千葉県柏市の幼稚園内の保育室で行われていた内輪のコンサートを後ろから見学させてもらったがものすごい衝撃を受けた。

「なんてオモシロいんだ！なんて楽しいんだ！」彼らのやってた音楽は、いままで体験したことのない“子どもたちの歌”だった。

早速「うちでもやってもらいましょうよ！」と園長に話しかけると、園長も乗り気ですぐに話がまとまり葛飾文化センターで親子コンサートを開くことになった。今でも覚えているが、薄暗い舞台裏で中川ひろたか、福尾のぼ、増田裕子の3人がゴソゴソ自分たちで準備をしていた。マネージャーもアシスタントもない、公演料は3人で6万円だと聞いた。

1980年代当時、保育現場で歌われていた曲は、まど・みちおさんの「ぞうさん」などに代表される童謡や、NHK「お母さんといっしょ」「みんなのうた」で歌われている曲、小学校で歌われる合唱曲を幼児向けにしたような曲。言ってみればクラシック音楽をしつかり学んだ作曲家の先生が作られた曲、というのが主流だった。（私のイメージですが…）

今も歌い継いでいきたい大切な名曲もたくさんあるが「トラヤ帽子店」というこどもの歌を歌うバンドは、そこに新風を吹き込んだ。

今でこそJポップを子どもたちが口ずさんだりクラスで歌ったりしているけど、当時はバンドをやってるようなミュージシャンがこどもの歌をつくろうなどということは思いつきもしなかったと思う。

中川ひろたかさんが後に「こどもの歌にロックを持ち込みたかった」と話していたが、まさにこどもの歌に“ロック”が持ち込まれたのだ！ロックってなんだ？という話を始めると横道にそれるので置いておくことにして、どんな感じだったかを言い表すと「童謡のように唱いやすく、歌謡曲のように親しみやすく、ロックのようにのりやすい！」と当時のチラシに静岡の百町森書店の柿田さんが書いた。これがこのバンドのパフォーマンスを言い当てている。

「いままでとちがう！でもイイ！」

僕ら現場の保育者にとって「トラヤ帽子店」の出現は大きかった。おそらく日本中のアンテナの高い保育者がそう感じたんでしょ、業界内で爆発的に人気急上昇して、追っかけまで出現するほどの人気バンドとなった。僕ももちろんその一人で、今まで苦手だった歌の時間が楽しくなり、クラスではトラヤ帽子店の歌を毎日子どもたちと歌っていたし、この音楽を子どもたちに届けたい！届けねば！という使命感のような思いまで持っていたので、香港の幼稚園に赴任した時には理事長と交渉してトラヤ帽子店初の海外公演を寄付を募りつつ幼稚園主催で行ったほどだ。

トラや帽子店が歌う曲は、クレヨンハウスから発行されていた「音楽広場」という月刊誌（前身は「幼児と音楽」という雑誌。現在はクーヨンという雑誌が後継となっている）に毎月「今月のうた」として連載されている曲を中心にどんどん生まれていった。メイキングは、中川ひろたか（作曲）・新沢としひこ（作詞）の二人だ。

新沢さんはトラヤのメンバーでは無かったけど中川さんとペアで多くの曲を作ってくれた。たとえば小学校の教科書に採用された「世界中のこどもたちが」、「にじ」などの名曲も初期の作品だ。

「トラや帽子店」というバンドは11年3カ月活動し、現在はそれぞれソロで活動をしている。もう20年も前に解散してしまったバンドなので、若い保育者でその名前を知っている人もほとんどいないが、「あたらしいこどものうた」は今やスタンダードととらえても良いのではないかと僕は思っている。



▶その頃の中川さんたちの活動の様子は『なかがわひろたかグラフィティ』～歌・子ども・絵本の25年～（旬報社¥1,600）に詳しく書かれていて、日本の幼児の音楽歴史を知る上でも面白い。

あそび歌

月刊「音楽広場」は今までにない新しい音楽を僕ら保育者に伝え続けてくれていた。それまで形式になんとかとらわれていた僕は目から鱗が落ちるような記事をむさぼり読んでいた。画期的な記事が満載だった。

「新しい子どもたちの歌」

「今月のうた」

「音楽あそび」

「子どもたちのすきなヒット曲」などジャンル分けされた曲の楽譜が付録でついていた。保育専門誌、音楽教室などの専門誌とは一線を画して子どもたちが音楽を楽しむための特集も新しかった。

その中に「あそびうた」というジャンルがあり、このジャンルのパイオニアでもあるクニ河内さん、湯浅とんぼさん、峯陽さんなどの曲と一緒に福尾のぼさんのあそび歌が掲載されていた。



福尾のぼさんはトラや帽子店のメンバーとなる前は、三島市役所勤務の公務員で、仕事の傍ら子ども会や保育者の研修会でレクリエーションの指導をしたり自作のあそびうたを披露していて知る人ぞ知る業界の芸人だったらしい。（その頃の野歩さんを知らない・・・）

トラや帽子店を結成する6年前の1981年には「福尾くんのあそびうたあつまれ」（ばるん舎）という本で、全国の保育現場で口伝のような形で受け継がれ、地方地方で展開してきたあそび歌（わらべ歌が発展したようなもの）を集めて図解入りで発行している。

その後、1986年の幼児と保育という業界誌のふろく「野歩さんとあそび」のあそび歌特集では“うたあそび人”という肩書きで紹介されている。



中川&新沢コンビの新しい歌が世の中に出ると同時に、福尾のぼさんの「あそび歌」もこの頃ジャンルを確立したのではないだろうか。

今や還暦を過ぎた福尾のぼさんだが、園コンサートに来てもらって、乳児クラスと幼児クラスの2日に分けてあそびうたコンサートを毎年公演してもらっている。

野歩さんのあそび歌が子どもたちに受けるのは、聴くだけでなく参加することが楽しい時間が過ごせるからだ。乳児クラスは、0～年少児の子どもたちが参加するが、この年齢の子どもたちが約45分集中してコンサートを楽しめるのは、野歩さん以外に知らない。



あそび歌を楽しむ

それまでも保育の現場では必須スキルであった「わらべ歌」「手あそび」に、よりダイナミックに遊べる「あそび歌」が加わったことで、子どもたちと音楽をぐーんと近づけた。

あそび歌は、幼児の音楽には欠かせないと思う。歌を触媒とすることで、隣の人と手をつないだり、触れ合ったり、ギャグを楽しんだり、子どもたち同士や保育者と繋がったり楽しんだりすることができる。

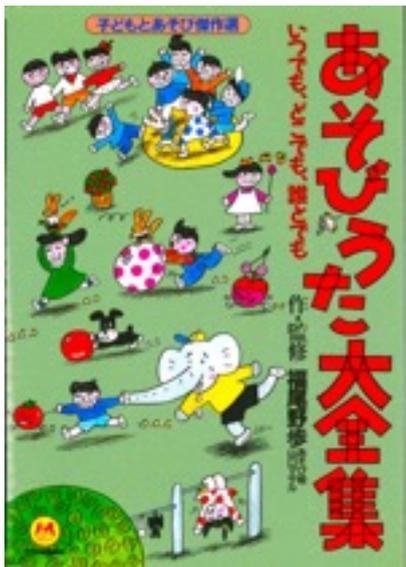
一つ付け加えなくてはならないのは、僕が男性保育者だから、おそらく福尾野歩さんや中川ひろたかさんの作ったあそび歌がしっくりくるんであって、女性の保育者に合うかどうかは演じる保育者のキャラによって変わってくると思う。

僕自身が、ケロポンズの増田裕子さん作のあそび歌や女性の作家さんが作った曲をやっても、いまいち子どもたちに受けなかったり乗ってこないで、それぞれ保育者自身の性別やキャラや嗜好によって、自分に合うあそび歌を選ぶと良いのではないかと考えます。

僕は毎月の誕生会で、年中長の子どもたち約100人を前にしてあそび歌を歌わせてもらっているけど気づけば12年目になる。誕生会が始まる前の楽しい予感を醸し出す前座だから約10分で導入からある程度みんなで歌って楽しむことが目的だ。そのためいろんなあそび歌を試してきた。同僚の保育者と一緒に歌ったり、ジャクエツという保育業者の営業マンの人にギター伴奏を弾いてもらったりして続けていくことができた。

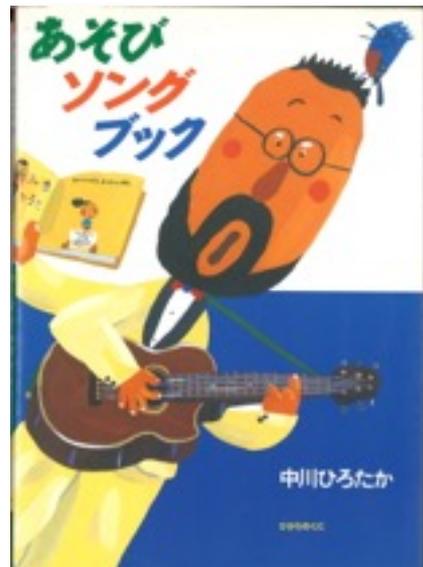
このたった10分の時間で覚えた歌を子どもたちは結構口ずさんでいるという。音楽の楽しさは、あそび歌を楽しむことから伝えていけるのではないかと考えて続けている。

譜面を載せるわけにいかないのですが、興味のある方には参考図書を紹介するので、ぜひ自分で子どもたちとあそび歌を楽しんでほしいと思う。



▶福尾のほ著「あそびうた大全集」
(1991年クレヨンハウス¥3689)

あそび歌を「まねしてあそぼう」「さわってあそぼう」「うたってあそぼう」「うごいてあそぼう」という4つのパターンに分けて編集されており、合わせてCDも発売されたことで、とても現場で使いやすい教材となった。この本でほとんどのあそび歌のパターンが出尽くした、野歩さんの集大成と言っても過言ではないと思う。その後若いあそび歌の作家さんが次々と登場して活躍しているけど、基本的なパターンは野歩さんが作ったものに集約されているように感じる。僕がいちばん活用している本です。我が子が小さい頃は車で移動中は常にBGMとして聴いていました。



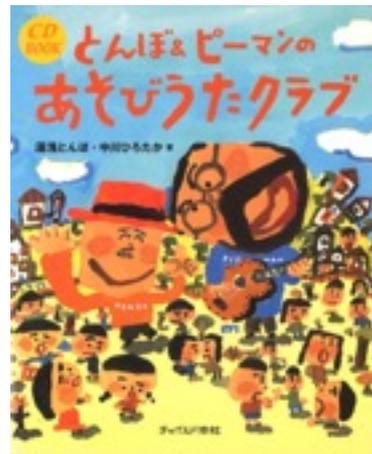
▶中川ひろたか著「あそびソングブック」
(2000年ひかりのくに¥1,500)

動きより先に歌がある感じなので「歌あそび」になるのかなあ、楽しい歌がいっぱいあって皆で歌うのに楽しい。動きの付いたものもあるけれど、わりとアバウトなので自分で考えても良いでしょう。曲はあそびうた大全集と重複したりしている。別売りでCD有り。



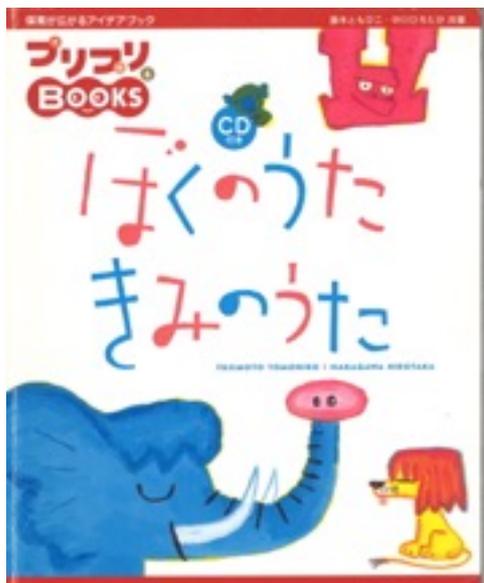
▶福尾のほ著「福尾くんのあそびうたあつまれ」
保育現場で歌われてきた口伝を採譜してまとめた先駆的なあそび歌の本。
(1981年ばるん舎¥1,000)

オーソドックスな定番あそび歌を野歩さん流振付で紹介するとともにのほさんオリジナルを掲載。



▶湯浅とんぼ・中川ひろたか著
「とんぼとピーマンのあそびうたクラブ」
(2003年チャイルド本社¥3,200)

比較的新しい教材本はCDブックが多くなり、曲のイメージがつかみやすくなった。比較的短く単純な曲が多いので、新学期～1学期。年少組で使うことが多い。



▶藤本ともひこ&中川ひろたか著
(2005年 世界文化社¥3,500)

保育雑誌プリプリの関連本としてCD付きで発行された。「まっすぐなこどものうた」というコンセプトで作られ、シンプルなメロディーと楽しい歌詞でいい歌が満載！あそび歌というより、歌あそび。歌うだけでも楽しいけれど、僕らはオリジナルの振りを付けて音楽会のオープニングに元気づけで歌ったりしている。No.1～3まで3冊発行されているので、その中からチョイスして歌っている。

ついつい古い資料の紹介や懐古趣味みたいな内容になってしまったが、あたらしいこどもの歌黎明期ともいえる時代の情熱やアイデア、勢いが感じられるので、今でも若い保育者に伝えて子どもたちと歌っているが、ちっとも古びた感じは無い。もちろんこのほかにも紹介したい曲はたくさんあるがまた機会があればにしましょう。

最近、原町幼稚園の教員たちは曲をYOUTUBEで探すことが多くなった。その中で気に入った曲があればダウンロードしたり、CDが楽譜を購入するというパターン。音楽全般がそんな流れになっているので、そうなんだなあ、と思う。子どもたちも次に音楽会で演じる曲をCDで聴いたり、ネットで見たりしている。それはそれでイメージが持ちやすいが、保育者のオリジナルを生み出す力はちょっと落ちてきているのかなあ～とも感じる。

あそび歌というジャンルを確立した福尾のぼさんは「あそびの例は示すけど、あとは現場でどんどんアレンジして楽しんでくれ！」と言っている。それがあそび歌の本質なのだろう。



原町幼稚園 園長 鶴谷圭一 (2017年現在)
1960年生まれ

1979年 都農聖愛幼稚園 (宮崎県実家にて助手勤務)

1984年 彰栄保育専門学校にて免許・資格取得

同年 葛飾みどり幼稚園に教員として勤務

1989年 オイスカ香港日本語幼稚園に主任として勤務

1991年 原町幼稚園 (妻の実家) に勤務

2002年 原町幼稚園園長として勤務→現在園長歴15年

HP : <http://www.haramachi-ki.jp/>

MAIL : office@haramachi-ki.jp

Twitter : @haramachikinder

「幼稚園の現場から」ラインナップ

- 第1号 エピソード (2010.06)
- 第2号 園児募集の時期 (2010.10)
- 第3号 幼保一体化第 (2010.12)
- 第4号 障害児の入園について (2011.03)
- 第5号 幼稚園の求活 (2011.06)
- 第6号 幼稚園の夏休み (2011.09)
- 第7号 怪我の対応 (2011.12)
- 第8号 どうする保護者会? (2012.03)
- 第9号 おやこんぼ (2012.06)
- 第10号 これは、いじめ? (2012.09)
- 第11号 イブニング保育 (2012.12)
- 第12号 ことばのカリキュラム (2013.03)
- 第13号 日除けの作り方 (2013.06)
- 第14号 避難訓練 (2013.09)
- 第15号 子ども子育て支援新制度を考える
- 第16号 教育実習について (2014.03)
- 第17号 自由参観 (2014.06)
- 第18号 保護者アナログゲーム大会 (2014.09)
- 第19号 こんな誕生会はいかが? (2014.12)
- 第20号 ITと幼児教育 (2015.03)
- 第21号 楽しく運動能力アップ (2015.06)
- 第22号 (休載)
- 第23号 大量に焼き芋を焼く (2015.12)
- 第24号 お話あそび会その1 (発表会の意味)
- 第25号 お話あそび会その2 (取り組み実践)
- 第26号 お話あそび会その3 (保護者へ伝える)
- 第27号 おもちゃのかえっこ (2016.12)
- 第28号 月刊園便り「はらっば」 (2017.03)
- 第29号 石ころギャラリー (2017.06)
- 第30号 幼稚園の音楽教育 (その1)
